三学期の抱負とその展開

幼児の集団の発達と人間関係を中心に

坂　倉　哉　子

(一)　三学期をむかえて

活動的な二学期を終え、いよいよ総まとめの学期、三学期をむかえました。入園以来、幼児たちが、自由にあそびをみつけ、自己を十分表出してあそび、その中で友だちをみつけ、友だちとあそぶこと、グループであそぶことの楽しさを知り、いろいろな経験や活動がくり広げられ、深められるようにと願いつつ保育をすすめてきました。そして、それらを支えているものは、教師と幼児のあたたかいふれあいであり、その中で変化していく内面的なものを、幼児たちの示すさまざまな要求からとらえ、適切な援助をしてやることによって、幼児自身満足な成長発達ができるように——と考えて指導してきました。今、三学期をむかえて、幼児たちの成長をふりかえりますと、まだまだいたらなかった面が次次とでてきます。

すでに集団内で、自分の能力を存分に発揮し、満足している幼児もいますが、ある面では自己の能力が十分に表出できずにいる幼児や、要求が受け入れられず集団に対して素直に適応できずにいる幼児など、教師としてどのように援助してあげたらよいのか。ひとりひとりの幼児が、自分のもっているものを、自分なりにだせることが楽しく、自分の力に自信をもつようになり、また友だちの能力もみとめ、交友関係の広がりや深まりができて、個

人としても、集団としても、生活に対して自由に働けるようになってきているだろうかということをまず反省しながら、残り少ない園生活を充実したものにしたいと思います。

(二) 三学期の展望

「先生、のりにきてな、切符はここにうっとるのやに」とグループであそんでいながらも、まだまだ安定せず、教師に援助を求めてくるようだった二学期にくらべ、三学期をむかえた幼児たちは、集団内でのおちつきが感じられます。どの幼児もグループの一員として、仲間に受け入れられることが大きなはげみになり、またその中で役割を果たすことに満足感を得るようです。しかし、その中には、さまざまな幼児たちの感情の交流があり、葛藤があります。

・ 自分の身勝手な感情で、仲間を動かそうとする幼児と、それをとりまく幼児たち

・ 仲間の感情を理解して、自分の感情をコントロールしようとする幼児

・ グループあそびを、より楽しくしようとするためグループ内での幼児のかかわりあい

・ 自分の能力にあうグループやあこがれているグループに所属したいために、自分の行動や感情をセーブしようとする幼児

・ グループの性格をみとめあい、互いに交流しあうことによって、自分を高め、経験を高めていこうとする幼児

など、このような幼児たちの行動を通して、その場その場の幼児たちの感情を理解し、援助してやることにより、集団的行動が深まっていくようにしたいものです。

一年生になるという喜びと期待で、生活に対して積極的になってきますので、そういった気持や態度を支えてやりながら、集団内の経験で育つ基礎的なものが、幼児自身のものになっていくようにしたいと思います。

(三) 三学期の実践から

互いに人格をみとめながらグループあそびをより楽しいものにしたい

お正月がすぎ、新学期がはじまると、休み中に新しく経験したあそびを園で再現し、気の合った友だち同士で、トランプや、かるたとりなどのゲームに興じています。家庭であそんだことと同じでありながらも、同じ年齢の仲間であそぶことは、またちがった楽しさや刺激があり、いろいろな面で意義があります。

お弁当の後、気の合ったもの同士が机をふたつくっつけて、動物あわせをしていました。動物あわせは、割合形が単純で、幼児

たちの視覚に印象づけられやすいのか、すぐ、どこに何があるという記憶がのこり、早く結果がでてしまうのでおもしろくなくなってしまうのでしょう、しばらくあそんだ後、乗物あわせに移りました。空、陸、海の乗物が複雑な構造で描かれています。ちょっとした形のちがいなどに気をつけ、物を正確にみるといった面ではとてもおもしろく、よく似た形のを平気で合わせて持っていき、最後に合わなくなったり、そのために、こんどはもっとたしかめてとろうとしたりします。

「先生も入れて」とたのむと、「あかんわ、せんせいはおとなやで、よう知っとるもんな」と受け入れてくれません。この頃になると、トランプの〝七ならべ〟のように、ある程度偶然的に勝負のきまるようなものは別ですが、自分の能力の限りをだしてあそべるようなあそびには、同じ能力のもの同士であそぶ方がおもしろいらしく、「先生、そこでみていてな」といって、自分たちで、さっさとあそびがすすめられます。見ていると、他のあそびではみんなと同じ程度のことができても、幼児によっては、知的な発達がおくれていたり、記憶力にも差があります。

A夫は、なかなか同じ絵をあわすことができず、だんだん顔がしょんぼりしていくのがわかり、何とか手助けをしなくては、と思いましたが、教師がはいることにより、形の上ではA夫は助けられて、カードが集められたとしても――（もはや、すっかりひとりだちできているA夫であるし、みんなと同等の気持であそんでいるのだから）自分だけがひとりでとれない、先生に助けてもらっている――という気持をもつであろう。また、グループのものたちの、A夫に対する見方などを考えて、どうしたらよいものだろうと思っていると、記憶力のよいY夫が「A君、水中よく船はA君のすぐ前だよ」と教えているのです。Y夫も他の幼児と同じように、たくさんのカードをとりたい気持はあるのでしょうが、一枚もとれないA夫の気持を察してか、自分のおぼえているのを一枚ゆずってA夫に与えているのです。見ていて私は、何て気のいい子なのだろうと思うと同時に、Y夫のあたたかい思いやりをとてもうれしく思いました。

でも、他の幼児は、こうしたY夫を、ルールを守らなかったかのように、「おしえたらあかんやんかYちゃん」とY夫にむかって抗議をするのです。たしかにルール違反にちがいないのですが、何とかこの場で、Y夫とA夫の気持がみんなにわかってもらえないだろうかと思いましたが、Y夫が「だってさ、A君一枚もカードないもの」といっただけで一回目はやがておわりました。もう一度やろうということで、二回目のゲームがはじまりました。一回目にわずかばかりしかとれなかったA夫は、このあそびからぬけださないだろうかと案じていましたが、「こんどは、ぼくA君と組になってやるわ」とY夫がいいだしたのです。この

Y夫の思いつきに、他の幼児たちも「そんならこんどはふたりずつ組んでやろうよ」と相談し、ゲームがつづけられ、A夫もよろこんであそんだのでした。

いままでは、こういったA夫のような幼児を助けるのは教師であり、教師の援助によって支えられ活動ができたのですが、もはや、グループの中で、教師の役割をはたしてくれているY夫の成長を見、またどうやったらうまくあそべるかということを理解し、互いに人格を認めながら、グループから脱落しないようにあそびをすすめている幼児のようすを見て、とてもたのもしく感じました。こうしたY夫の援助によって得たうれしい気持は、A夫にとってつよく印象づけられ、より強い友だち関係ができていったように思われます。また逆に、自分のつごうで仲間との協力を求めるような態度をとる幼児もいますので、そのようなことにならないようにしなければなりません。

> 自分の感情をコントロールして、仲間といっしょにあそびたい

自分の意志を通そうとして、仲間に受け入れてもらえないとき、その場でおこりだしたり、なげやりな行動をすることがあります。そして、その幼児が、仲間から排他的になったり、対立的な関係になってしまう場合がしばしばみられますが、経験の積重ねによって、どのようにすれば仲間とうまくあそべるかを理解していくようです。

こやぎとおおかみにわかれて、おいかけ鬼のようなかたちで、おおかみにつかまえられたこやぎは、おおかみの陣地にとらえられ、こやぎはにげまわり、おおかみがそれをおいかけるというあそびが戸外で活発にはじめられました。スライドでみた〝七ひきのこやぎ〟にヒントを得て、いつもしている鬼あそびが、おおかみとこやぎの役割にわかれてあそばれたにすぎないのです。ちょうど、このチャンスをとらえて、劇的な活動にむけることにしました。そして二、三回劇的な活動をみんなでしたあとの日のことでした。

M夫が中心になって、「おおかみとこやぎの劇しよ」ということになり、幼児たちだけではじめられました。みんなのやりたい役はいつもきまっていて、おおかみにつかまえられずに時計の中にかくれる一番小さいこやぎの役です。その時も、みんなやりたくて大さわぎ。すると、M夫が「そんなに小さい子やぎばっかりなってもできやんわ、じゃんけんできめな」といっているのです。教師としては、じゃんけんで何でも解決しようとすることには抵抗を感じ、何かいわなければという気持も働いたのですが、「きょうはせっかく子どもたち自身でしようとしているのだから、そっと見守ってみよう」と自分にいいきかせ、だまって見て

いました。やりたいという幼児たちは、真剣な表情でじゃんけんをはじめました。ふたりずつにわかれてだんだん勝ったものが残っていくという方法も、このころになると、スムーズにできるようになっているので、じゃんけんは公正に行なわれました。

T夫はいつもこの役をしたがるひとりで、いままでは、よくこの役にあたっていたのですが、この日はじゃんけんに負けてしまったのです。「ぼくどうしてもこの役したいんだもの」とさかんにリーダー的なM夫にうったえているのです。けれどもM夫は、「じゃんけんで負けたであかんわさ、ほかの役するやわ」といってとりあげてくれないので、T夫は半分なきべそをかきながら、ひとりで「ぼくしたいんだもん」と何回もいっていましたが、結局だれからも問題にされず、M夫を中心にどんどん役割がきめられ、あそびがすすめられていきました。T夫はしょんぼりと、これといったこともせず、ぶらぶらへやの中を歩きまわっていました。教師としては、やはりここでT夫に何かいってあげたい気持になり、「T君、またこんどあのこやぎの役したらいいわ、きょうはじゃんけんでまけたんですものね」と、声をかけると、「いいの」といって、はずかしそうにまたへやの中を、ぐるぐるまわり歩いていました。今までのT夫だったら、無理を通して、他の幼児があそべないようにしたりして、くやしさと友だちへの攻げきにむけるような幼児でしたが、どうしてもやりたい役になれなくておこりだしたい気持をおさえて、だまって耐え、部屋中をぐるぐる歩きまわることで、自分なりに気持を整理し、がまんしようとしていたのではないかと思われます。こうした耐えるという経験は、次の機会にはさほどむずかしく感じなくなり、自分の感情をコントロールしながら、いろいろな役をやることができ、劇をしている一員であるということによろこびをもつようになったことは、T夫の大きな成長だと思いました。

同じ目的にむかってあそぶことで満足を高めたい

少しあたたかい日などは、砂あそびなど戸外でのあそびがさかんにおこなわれます。「なんやこんなもん、こわしたろか」などといって、あそびに参加したい要求がうまくいえず、敵意にみちたことばを投げかけていた幼児もいなくなって、この頃になると、集団への参加のしかたがスムーズにできるようになり、素直に「ぼくも入れて」と友だちの承認を得てあそびがはじめられます。そして、共通の目的にむかって、グループのみんなが協力的なあそびをしているようです。

砂場でドライブウエイを作っていたグループに、少しおくれて登園してきたB夫がやってきて、早速「いれてね、T君」といっています。リーダー的なT夫は、グループの一員のB夫がやって

きたということが声でわかるのでしょう。B夫の顔もみず、「ああいいよ、いまドライブする道作っとるの」と目的を知らせ、けんめいに山の頂上に近い部分の道をつくっているのです。他の幼児たちも、同じ目的にむかって、それぞれが、道の分担作業を声もなくやっています。参加したばかりのB夫は、どこから手をつけようかといった表情で、しばらくみんなのようすを見ていましたが、「ぼくはね、山の高いところへ砂はこんでやるよ」と自分に適当だと思う仕事を見つけ、T夫の手伝いをしながら、みんなに協力しているのでした。

すでに三学期になると、幼児自身で集団への適応のしかたがわかり、随時友だちの求めに応じて、スムーズに共同的な行動がとれるようになってきます。そして、ひとりではできない経験をわかちあってすることにより、満足が高められていくようです。

グループの交流をはかり、学級の共通の目的にむかって活動したい

幼児たちは、グループの中でそれぞれの人間関係が密接になり、ひとりひとりの幼児が自己を表出して満足できるようになってくると、固定化したグループ内での活動や、人間関係では満足できないようになり、学級全体として活動する中で、もっと多くの友だちとの交渉をもち、経験を広め、満足を高めたいという要求をもつようになってきます。

それには、個人差の多い幼児ひとりひとりが、喜んで参加できるような場をつくってやることが必要で、幼児たちの共通の興味や要求を満足できるような経験や活動を、教師は幼児とともに計画し、学級全体として活動できるようにしてやらなければならないでしょう。そこで、三学期の一つの活動として、劇的な活動を考えてみることにしました。

幼児は、友だちとのあそびの中で、そのものになりきって自己を表出したいという要求をもっています。そういった気持を満足させるために、今までに、自分がそのものになりきってあそぶ〝ごっこ〟をしたり、その中でそぼくな劇的な活動も、しぜんにくりひろげられてきています。そして二学期末のクリスマス会には、自分たちの印象にのこったストーリーなどで簡単なものを劇化して、グループで劇あそびをするという経験もして、幼児なりに劇的な活動を把握してきました。しかし幼児たちは、ただグループで劇あそびをしているというだけでは満足できず、演じて誰かにみていてもらいたいという要求をもつようになってきます。こうした劇的活動に対する幼児たちの気持やかまえを満足させてやるためにも、また発達的にみても教師は幼児とともに学級全体で計画を立て、みんなで活動ができるようにしたいと思いました。教師自身の計画としても、一年間のしめくくりとしてひとり

ひとりの幼児の成長を、父兄に見てもらうことを予定していましたので、発表会のもちかたをどのようにしたらよいか、幼児たちとともに計画を立てようと相談をもちかけました。

歌をうたったり、みんなで楽奏したり、劇をしたいという案がでました。しかし劇をするには、みんなでひとつの劇を演じることは人数のつごうで多すぎるのではないかという意見がで、三つのグループにわかれて劇を選ぼうということになりました。

〃七ひきのこやぎ〃 〃大きな大根〃はすぐに幼児たちの中から選ばれ、あとひとつ何にしようかとみんなで考えているときでした。H子が月刊絵本〃よいこのくに〃の中の〃うさぎとながくつ〃の物語を思いだしたのでしょう、「せんせい、うさぎとながくつのおはなしの劇しよ」といいだしたのです。先日みんなで読んだばかりの絵本の物語なのできっと幼児たちも印象にのこっていたでしょう。H子の発案でこの物語を劇化することになりました。うさぎのひろった変なものが何であるかわからず、森の動物たちにつぎつぎと聞いて歩くのですが、それぞれぼうしだとか、かびんだとか、かいものかごだとかめいめいなことを教えてくれる物語です。三つの劇のうち、やりたいものひとつを選び、自分の選んだグループ内で、配役や仕事の分担などをはなしあうことにしました。しかし、三つのグループが登場人物にあったように人数を等分することはなかなかできず、かたよりができ困りました。みんなではなしあい、人数の調査をし、自分の気持をセーブしながら、ゆうずうをつけてくれたH夫やM子らの助けによって、ようやく三つのグループの構成ができました。

この〃うさぎとながくつ〃の劇をやろうと思う十三人のグループの中で、それぞれやろうと思う配役をきめることになりました。登場人物それぞれが特に目立った役でもなく、みんな平等に対話のできるストーリーなので、うさぎになりたくても、それになれなかったものは、りすでもさるでもがまんでき、このグループ内で、やるたびに役をかわりあってやり、自分がもっとも適当だと思い、また友だちもみとめてくれる役をみつけ、ひとりひとりが納得のいく活動をして、はじめて自分のきめた役割や仕事がまっとうできるようでした。

劇に必要な道具作りにも、自分がやろうと思う役、うさぎになろうと思うものは、うさぎの家つくり、草花つくり、長ぐつつくりなどの仕事を、うさぎのメンバーではなしあって作業にとりかかることになり、さるはやお屋らしく店づくり、野菜やくだものつくりといったように各々が相談しあって作業をしました。もちろん最初の段階につくった小道具は、発表会ではきめた役割のものが、また新しくつくりなおし、発表会をもりたてるための環境つくりやで、自分の役割として受けもってやりました。

この劇をやっている間は、他の二つの劇のグループは観客とな

って見ているわけですが、見ていて劇をもりたてるためにはどうしたらよいかということを考えながら見るようになり、自分が出演しない劇についても協力的な見方をするようになります。例えば、長ぐつをもって歩く場面など「ただ持って歩くだけではおもしろくない」という批判がで、その場面の演出をみんなで集って考え、音楽でつなぎをくふうしてみようということになり、〝何でしょ何でしょ〟という歌をみんなでつくり、うたってたずね歩くことになりました。また、見ていてうさぎの家の草花が足りなかったり、おさるの家のくだものが足りなかったりすると、他のグループのものが援助して作ってあげるなどしました。

見ている二つの劇のグループのものたちも、やはり自分たちのやっている劇だけに満足できず、この劇をかわってやってみたいという気持をもつようになってきますので、他のグループの演じるのを見ることにより、自分がやるときくふうがなされるようになり、自分の受けもつ役について真剣にとりくみ責任をまっとうしようと思うようになってきます。このようにして、お互いのグループが刺激しあいながら、また援助しあいながら、しかも学級全体のものとして活動をすすめる中で、幼児自身なっとくのいく活動ができるようにしてやりたいと思います。そして、おおぜいの友だちとの交流により、より自分を高めていくのではないかと思われます。

いずれにしても、三学期では、学級全体の幼児が、自分たちではなしあいにより計画を立て、それを実行に移すことによって満足を得るようになってきます。実際には、学級全体で相談し、グループにわかれて作業をし、問題があればまた学級全体で相談をするというくりかえしですが、学級全体の活動とグループの活動との関係を、ひとりひとりの幼児が見通して活動できることは、とてもたいせつなことでしょう。

㈣ おわりに

一学期、二学期、三学期と一年の保育の過程の中で、幼児たちの示してくれたさまざまな要求を、私なりに受けとめ、指導を考えてきました。個人差のある幼児ひとりひとりを支え、その幼児なりにのばしてやることはたいへんなことです。しかし、そういった個々の幼児の要求をみたし、自発性や機知をだせるようにしながら、経験を修正してやることに幼稚園における集団の経験の意義があるように思われます。そして、そういった人間関係の中で得られた経験は、将来その幼児の本当のものとなっていくのではないかと思われます。そういった意味からも、私たちの課せられた務めの重大さを再認識し、幼児たちのゆたかなパーソナリティが形成されていくよう努めなければならないと思います。

（四日市市立　富田幼稚園）